

Issues in Contemporary Australian Literature :

Notes on the Perth International Arts Festival 2012

Keiji Minato

Ritsumeikan University

Abstract

The Perth Writers Festival 2012 was held at the University of Western Australia from the 23rd to the 26th of February as part of the Perth International Arts Festival 2012, which has the longest history as an international cultural festival in Australia. I was lucky to attend a variety of sessions from the 24th to the 26th and hear intriguing opinions and discussions of both Australian and international writers.

Subjects discussed were varied and not easy to sum up ; however, several recurrent themes were noticeable. The first was of relationship between fiction and facts. Most writers, especially ethnically-minority authors, confessed that they depended heavily on their family history. On the other hand, they also admitted that the act of writing inevitably curtailed fiction, and they regarded such fictionality as the very source of power of their creation.

The second dominant theme was the question of how to depict negative elements in human life. Many participants considered that writers in the post 9.11 world inevitably dealt with the darker side of human history and psyche. As another side of the same condition it was argued that authors in genre fictions like SF, horror, and detective fiction must weigh up the moral and entertainment values of their works more seriously than they used to.

The third theme I found important was the strong emphasis on the resilience of Aboriginal culture. Aboriginal writers and artists today are more active agents in their creative process than their predecessors and boldly experiment in traditional and non-traditional forms. Aboriginal artists and their collaborators made clear that their works were also deeply rooted in their communities, which were also seeking out a new way of envisioning their future.

The Perth International Arts Festival offered many other events besides the Writers Festival. They also gave the audience a great sense of how literature and arts perform significant functions in today's increasingly fluid world.

2012 年度パース国際芸術祭に見る オーストラリア文学の現状と課題

湊 圭 史

立命館大学

本稿は、2012年2月、西オーストラリア州パースを訪問し、パース国際芸術祭(Perth International Arts Festival)を視察した際の記録をもとに若干の考察を加えたものである。豪州の文化系フェスティバルではアデレード芸術祭(Adelaide Festival of Arts)が有名だが、パース国際芸術祭は規模においては劣るものの、オーストラリアの同種の催しで最も古く60年の歴史を誇っている。毎年度開催となっており、さらに、地勢上独特の位置にあるパースの特徴が出た催しが多く注目に値する。ここでは今回の視察から、芸術祭中でも作家や詩人による講演やシンポジウムが集中して行われた作家フェスティバル(Perth Writers Festival)の感想を中心に報告してみたい。(文中、セッション名および作家名が多数出て煩雑なため、原語表記のみとさせていただいたこととお断りしておく。)

作家フェスティバルは2月23日から26日まで、4日間に渡って行われた。会場は西オーストラリア大学。講堂や劇場に加えて、二つのテント会場と野外ステージが使用されていた。二つのテントはロミオ・テントとジュリエット・テントとの名称。主催者の遊び心が感じられて楽しい。大学の施設も多様で、バルコニー席もある演劇用の劇場や傾斜のない広い集会所、パイプオルガンに聖歌隊席がある講堂と、さまざまな用途に合わせたイベント会場があり、研究・教育のみではなく、地域の文化的ハブとして機能するよう作られていることが分かる。広くて緑が多いキャンパス、西洋の古典様式に準じながら色の薄い砂岩をもちいることで重苦しくなく明るい雰囲気をかもしだしている建物に好感をもった。

23日の晩に行われたオープニング・スピーチは、日本でも『去勢された女 *The Female Eunuch*』(1970; 邦訳日向あき子・戸田奈津子, ダイヤモンド社, 1976)の著者として名高いフェミニズム批評家 Germaine Greer による“Eco-Feminism Then & Now”。残念ながらこの講演は聞き逃したが、環境問題と社会的関係(ジェンダー)の交差は翌日からもしばしば取り上げられた。作家フェスティバル全体に、文化的創作物である文学を多様な社会的関係のなかで見直す、という狙いがあったと推測される。また、豪州出身ながら長く海外で活躍している Greer がオープニングを担ったことには、ナショナリズムに閉じることなく、世界の潮流を紹介するのだという主催者の気概も感じられる。

最初に聴いたのは、24日午前11時から行われた“Negotiating Dark Matter”と題された3人の作家(Janette Turner Hospital, Elliott Perlman, Peter Godwin)によるセッション(司会 Philip Adams)。HospitalとPerlmanは豪州の人気作家、Godwinはジンバブエ在住のヨーロッパ系作家である。題にある“dark matter”とは、社会的・精神的にネガティブな要素を指す。いわゆる9・11同時多発テロ以降の状況を*Orpheus Lost* (2007)でとり上げたHospitalは、社会的状況において時に避けがたい“dark matter”にいかにか個人が対処するかを描こうとしていると語り、新作*The Street Sweeper* (2011)でナチスドイツによるユダヤ人虐殺を主題としたElliotは悲惨な状況を内面化せざるをえない被害者、加害者、傍観者について語りながら、カフカなど先行作家による独特のユーモアに希望を見出していた。アフリカの混乱した状況を「回顧録 memoir」として描いているGodwinは、インタビューを行った際の精神的外傷を受けた被害者の話し方の変化といった具体的な創作プロセスにおける逸話を披露。フィクションと事実の関係についての問いが何度も俎上に上っていたが十分に深められないままだったのに不満が残るが、文学が大きなテーマにどう向かってゆくか、正面からとりあげようとしたことを評価したい。

同日、12時半からの若手作家たち(Craig Sherborne, Michael Sala, Favel Parrett, 司会 Julienne Van Loon)によるセッション“Stories That Spill Out From Real Experiences”も、実際の経験とフィクションの関係がテーマ。オーストラリアの文学では、フィクション作家とノンフィクションや回顧録(memoir)の書き手が分化する傾向にあるらしく、そうした区別を越えた「書くこと」の意味はどこにあるかについて意見が交わされた。Sherborneは、小説は「事実 fact」とは違う「感情における真実 emotional truth」を描こうとする、他の作家の文体を真似て書くとしても最終的には自分自身の経験を「投資 invest」することがなければよいものは書けない、と述べた。また、純粋な虚構として書いたキャラクターでも現実の人物と結びつけて読まれる傾向があるとの意見が出て、twitterやFacebookといった誰でも参加できるメディアの存在する今における虚構と現実の境界をどこに探るべきか、それは最終的に個人の責任で決めるより他ないのではないかという結論であった。

2時からは、Alice Pung, Kim Scott, Arnold Zableの三人のオーストラリア作家による“Welcome Stranger”(司会 Antonio Casella; 予定されていた Mandy Sayer は欠席)。興味深かったのは、移民社会である豪州において避けられない文化衝突・交流における変化がポジティブに捉えられていた点である。Pungは中国系カンボジア人の二世、*Her Father's Daughter* (2011)で国際的にも注目の作家。Kim Scottはマイルズ・フランクリン文学賞(Miles Franklin Literary Awards)を二度受賞したアボリジニ作家。Arnold Zableはニュージーランド生まれでメルボルン在住のギリシャ系ユダヤ系作家。バックグラウンドが異なる3人の話は、それぞれ違った視点からの歴史語りにもなっていた。Pungは父との個人的な関係を中心に、10年の調査ののち、執筆に4ヶ月かけて作品を完成させた経緯を、Scottはヨーロッパ人の西

オーストラリア植民の過程で先住民が見せたヨーロッパ文化の取り込みを従来見られていた文化的同化 (cultural assimilation) としてではなく、先住民の側の積極的な自分たちの「儀式 ritual」への取り込みとして読み直しつつあることを語った。Zable はメルボルンでの反ギリシャ系暴動など、忘れられがちなマイノリティの歴史を掘り起こしつつ、特異な (specific) 事象を普遍的な (universal) ものとする物語 (story-telling) の力への信頼を表明した。Zable の言葉に対して、ドキュメンタリーとして作品を読まれがちな先住民系作家の Scott が、フィクションを書くことの魅力、断片から始まってどこに行きつくのか分からない楽しさをのびのびと語っていたのが印象的だった。

5 時からは “It’s All Speculation” (Lara Morgan, Carole Wilkinson, Lauren Beukes, 司会 Helen Merrick), SF やファンタジーといったジャンル・フィクションの作家たちによるセッションを拝聴。南アフリカの作家 Beukes は未来に舞台を設定しながら、世界の現状に対する怒りを表明しているのだと、社会的な意識が強いことを明らかにしていた。パース在住の Morgan はパースの地勢的な位置からくる孤立感がリアリズムより「思索的・空想的な」(speculative) ジャンルへ向かった理由ではないかと語り、タスマニア在住の Wilkinson は中国の龍についての言い伝えなどから世界像を設定して、「歴史ファンタジー historical fantasy」を書こうとしていると述べた。ここでも作家たちの姿勢の違いが見え、文学のジャンル分けについても、ジャンル・フィクションというかたちで分けることに反対する立場と、マーケティングなのではないか、書店で探すときに便利では、と意見が分かれて、作家の具体的な関心についての告白として面白く聞くことができた。

25 日 9 時半からは “What’s The Problem With Poetry”. 詩をとりあげるセッション・講演が少なく、詩に興味をもつものとしては寂しい気がしたが、アイルランド詩人 Dennis O’Driscoll と David Brooks, Cate Kennedy の二人のオーストラリア詩人によるこのセッションは詩を正面からとり上げようとしたもので注目した (司会 William Yeoman)。Kennedy が現在の混沌とした社会で詩が「慰め consolation」を個人に与えようとすると詩の普遍的な力への信頼を述べたのに対して、Brooks は詩人と一般読者のあいだに大きな溝 (disjunct) がある現状は問題であり、詩人の側から積極的につながり (connection) を求めていくべきではないかと、電子メディア・携帯電話などの情報が氾濫する現代における詩の危機を指摘した。一方では極端に個人化し、またもう一方では大衆に直接つながろうと焦燥するこのオーストラリア詩人の姿勢は、O’Driscoll が述べる W. B. イェイツ以来の詩歌の伝統が色濃く、詩人への尊敬がふだんは詩を読まない人々にも共有されているというアイルランドの状況に比べて豪州における詩の立場の難しさを感じさせた。Brooks が指摘するように、アメリカやヨーロッパに比して豪州の政治家が豪州詩をスピーチなどで引用することはなく、大学における研究・教育でもオーストラリア文学のコースが減りつつある (専門の大学ポジションはシドニー大と西オーストラリア大の 2 つのみ) ことなどに鑑みると、豪州独自の詩・文学が一般にどの

程度浸透しているのかはかなり疑わしい。全体的に、日本の現代詩の文脈で語られている詩をめぐる問題点とあまりに共通していて、オーストラリアの独自性などが見えてこなかったのが不満だった。

11 時からの Kim Scott による “Keep Language Alive” は、今回のフェスティバルの中で一番興味深いセッションであった。小説家としてオーストラリアを代表する Scott だが、アボリジニ・コミュニティにも積極的に関わり、先住民言語・文化の回復のために尽力していることでも知られる。言語はコミュニティのネットワークを作るための手段のひとつでしかないが、「土地 place」がもつ「先祖からの音 ancestral sounds」につながるために不可欠であり、20 世紀前半に人類学者が残したノートなどからの情報を集め、当時をまだ憶えている人々の話と照らし合わせて、コミュニティ全体で「話し合い negotiate」しながら、失われつつある語りの文化を再生するための「道具 instruments」として言語＝語りを意識的に再構成しようとしている、と Scott は語る。「口承 oral」と「紙 paper」の文化の二項対立を越え、また、アカデミックな枠組みに閉じこもるのではなく、生活者としての先住民系の人々によるワークショップとして言語や物語を回復する作業自体が、コミュニティの物語として立ちあがってくるようにと、大胆さと細心さを持ち合わせた試みであることが、Scott の魅力的な語りから伝わってきた。刑務所の囚人たちとのワークショップや、学校での語りの実践も含めて、さまざまな枠組みを越えた広がりを企図しているところも好感がもてる。聴衆からの質問に対する Scott の返答も考えを深めるものだった。「ヌンガー Noongar」（パース周辺地域のアボリジニの名称）の言語はいくつあるのか、という問いに対しては、20～30 言語と言われているが、そうした数は重要ではなく、一人ひとりの語り手をもつ言葉の多様性を重視していきたいと述べ、言語を学びたいがよい教材はあるかという質問に対しては、本や教材を先に用意すると、人々の記憶や日常にある多様性を消してしまう、またそうしたマテリアルを手にするのできる経済的に有利な人々がコミュニティの人たちより先に言語を所有してしまう危険があるので、生活に結びついた場面で時間をかけてまず言語文化的広がりを作っていこうとしている、と答えていた。コミュニティ内部での多様性が持つ豊かさを守りながら、新しい媒体としての言語や語りを見出していこうというこうした試みは、言語や物語文化に対する新しい視点を提供してくれるかもしれないと期待をもった。

12 時半からは、“Stories from the Western Desert”。大学キャンパス内のローレンス・ウィルソン・ギャラリー（Lawrence Wilson Gallery）で開催中の展覧会 “Purnu, Tianpi, Canvas. Art of the Ngaanyatjarra Lands” に関わった Tim Acker, Hetti Perkins, John Carty によるセッション（司会 Terri-Ann White）。近年のアボリジナル・アートの展開について、実際に活動に参加している人々からの最新の情報を聞くことができた。ここでも重視されているポイントのひとつが「多様性」だった。展覧会のタイトルの “Purnu” とは木彫り（wood carving），“Tianpi” とは草を編んでつくったカゴや人間・動物の形（grass weaving）を指す。ヨーロツ

パ人によって持ち込まれたメディアである絵画 (canvas) とともに、伝来の手法をアレンジした木彫りや草の編み物が、近年のインターネットやアート・センターの設立による機会の増加にともなって、世界市場にのる芸術表現として生まれ変わってきていること、アボリジニ芸術は絵画メディアにおいても地域ごとの多様性を保っていることなどが紹介された。問題点として、アボリジナル・アートを芸術として語る際に英語では限界があること、優れた論の書き手が芸術批評より人類学者や実際にマーケットに関わる人々に偏っていることがあげられた。また、創作に携わっているアボリジナルたちが評価を受け身に待っているだけではなく、どうした作品が優れているか、売れるのかを強く意識しているという指摘は、考えてみれば当然のことながら、政治的にマイノリティ・グループに属するアーティストの主体性を考える上で重要であろう。Scott のセッションと合わせて、従来の「正当性 authenticity」を強調する本質主義の言説から離れ、文化の「弾性／回復力 resilience」を見る視線が形成されつつあることが分かる。

26 日、9 時半からは “Shady Characters”。オーストラリア作家 3 人 (Rohan Wilson, Cate Kennedy, Elliot Perlman) によるセッション。テーマとしては、24 日に聴いたセッション “Negotiating Dark Matter” と重なるものだが、社会状況よりキャラクターに焦点を当ててということのようだった。ただし、内容として結局あまり変わらないものになったと感じた。Wilson は *The Roving Party* (2011) で、植民地時代初期のタスマニアにおいて白人の側に立ってアボリジニ狩りに手を貸したアボリジニ男性 Black Bill を主人公に設定している。他の 2 人も、社会的に後ろ暗い選択を迫られるキャラクターを描いていて、そうした設定は単なる善人を描くよりも人間の限界や心理をえぐるのに適していると考えていると述べていた。深みのあるキャラクターの要素となるという意味では、読みどころのある物語を書くための技術的要請でもあり、社会的テーマが提示するモラルとどのようにバランスをとるかが作家にとっての悩みどころであると見えた。

11 時からは、“Wilderness and Preservation in a Globalised World” (Victoria Laurie, Donovan Hohn, Sara Foster, 司会 Scott Ludlam)。環境問題がテーマ。批評家・アクティヴィストの Laurie は「豪州は白人が所有している」という従来の考えが薄らいできていて、それが自然に対する考え方にも影響しているという。しかし一つの生物種の保護についても、包括的な環境への取り組みが必要であると述べた (例：渡り鳥であれば豪州側で保護しても渡り先の海辺が護岸工事されることで絶滅する可能性が高い)。Hohn はアメリカのジャーナリスト、著作 *Moby Duck* (2011) は輸送船から海に流れてしまった風呂場玩具のプラスチック製アヒルの行方を辿ったノンフィクション。タイトルは 19 世紀のアメリカ作家ハーマン・メルヴィルの『白鯨 *Moby Dick*』(1851) をもじったものだ。『白鯨』が不可知の自然の偉大さを表したとすれば、小さなおもちゃのアヒルに代表されるような人工物が世界の隅々までをおおってしまったのが現在の状況であり、手つかずの自然のイメージもメディアが繰り返す

使う商品に過ぎないと指摘。西オーストラリアの作家 Foster は都会のアパートの住んでいると「土地 place」との関係を実感することはなく、スーパーマーケットの商品も何が入っているのか知ることは不可能と述べた。司会の Ludlam は上院議員であり、議論の中で、環境対策、特に法制度整備のスピードが自然破壊のそれに追いつけないことを問題としてあげていた。一般にどのように関心をもってもらうべきか、という質問が聴衆から出たが、Laurie の返答は「対決姿勢 confrontational」にならないように気をつけて、「環境ファシスト eco-fascist」と見られることを避ける、というものだった。アートにしる社会問題にしる、現在においては単なる注意喚起や警告では十分でなく、一般参加を促すようなアプローチが必要ということだ。

14 時からは“Making Memoirs” (Julietta Jameson, Alice Pung, Michael Sala, 司会 Sarah Schladow)。自伝的な作品を書く作家たちによるセッション。Pung の *Her Father's Daughter* では「私」と「父」の二つの視点が用いられるが、それは父に理解しがたい面があるからだという。ヴィクトリア州でのブッシュファイアの時、父が Pung には異常に思えるほど怯えていたことなどをあげ、親子でも違った現実 (realities) を生きているのだと感じているという。また、作品を書く際に父からの聞き書きを行ったが、直接顔を合わせてはできず、海外からインターネットのサービス Skype を使ったことを明かしていた。Sala は三人称で書くのが好きで、その理由は視点を変えられることができるからであり、また思い出を書くときもコメントを差し挟むのは避け、描きだす人物に出来事を生きさせるように心がけているという。Jameson は、ノンフィクションであっても書くことは編集作業であり、一種の「作り話 myth」、現実そのものではない「私の現実」を描きだすのだと述べていた。現実を描くことの治療的な (therapeutic) 効果も話題となり、現実を基にしながらも「書くこと」で生まれる価値、「書くこと」の価値が前面に出た議論となっていた。

15 時半からは“Portraying Evil” (Glen Duncan, Alan Carter, Michael Robotham, 司会 Naama Amram)。Robotham は「人を殺したいと思ったことがあるか」というアンケートや心理学上の実験の結果から、「悪 evil」は誰もが抱えているものであり、状況が整えば悪事を働く可能性は誰にでもあると述べる。また、「悪」には決まった形 (form) がなく、捉えがたいと指摘した。Duncan は子供の頃にはキリスト教カトリックの枠組みで教育を受け善悪の図式ははっきりしていた、しかし、成長して哲学などを学んで分からなくなった。現在ではどのような状況に「悪 evil」という言葉が使われているかを考えていて、それは自身との関係を絶対的に否定、拒絶するために用いられることが多いのではと述べた。「善悪 good/evil」という言葉に私たちが拘る理由について、心理的な防衛のテクニックであり、現実をラベルづけして楽になるためであるとの指摘もあった。また「悪」は必然か、という議論では、常に選択肢はあるはずだ、また「悪」は無くならないだろうが、作家として一番大事なのは、新しい語り方や考え方を見つけていくことだという議論もなされた。

17 時からは、“Angry Penguins” (Steven Carroll, David Brooks, Frank Moorhouse, Hilary McPhee, 司会 Tony Hughes-d’Aeth)。まず、Brooks が『アングリー・ペンギンズ *Angry Penguins*』について基本的なことをまとめた (『アングリー・ペンギンズ』はアデレードで 1940 年代に出されていた前衛芸術誌。でっけあげの詩人アーン・マリー (Ern Malley) の詩を掲載して騒動を巻き起こしたこと、画家シドニー・ノーラン (Sydney Nolan) が表紙の絵を担当したことでも有名)。このセッションのタイトルの「怒れるペンギンたち *angry penguins*」は第二次大戦前後の理想主義的なオーストラリア人を指そうとしたものらしい。Moorhouse は最近出版した Edith 三部作 (*Grand Days* (1993), *Dark Palace* (2000), *Cold Light* (2011)) に関連して、第二次大戦前にユートピア的発想をもって国際連盟に職を求めた若者たちのことを語り、またキャンベラの建設や第二次世界大戦後の移民受け入れなどにも、オーストラリアのかつてもっていた理想主義、楽観主義が現れていると述べた。McPhee は映画監督 Tim Burstall もまた「怒れるペンギンたち」の一人であったとして、Burstall の日記 (*Memoirs of a Young Bastard: The Diaries of Tim Burstall* (2012)) に記された当時の雰囲気語った。Carroll は叔母がシドニー・ノーランと同時代の作家で田舎に住んでいたが、第二次大戦後の郊外の拡大でそうしたライフスタイルが飲み込まれてしまったと述べた。第二次大戦前後の雰囲気について、共産党が活発に活動し力をもっていたこと、大量の帰還兵が社会を大きく変えたこと、芸術家のサークルが狭くパブでの会話などが重要なコミュニケーション媒体だったことなど、歴史書では知ることができない豪州史の側面を耳にすることができた。Brooks は画家ノーランが存在しないアーン・マリーの像を作り上げたこと、同時期に制作されていたネッド・ケリーのシリーズでは頭にかぶった箱の覗き穴から向こうの空が見える、つまり、存在しない存在を描いたことを合わせて指摘し、そこには伝統から切れた芸術の在りようを求める心理が働いていたのだと指摘した。それ以前の荒っぽさの残る社会と、それ以降の一種の洗練を取り入れることになった時代のあいだで、豪州が自分たちの文化を発見する息吹が感じられた面白い時期だったのだろう。

パース国際芸術祭では、作家フェスティバル以外にも多様な催しが行われていた。特に印象的だったものを二つあげておく。フレマントル・アーツ・センター (The Fremantle Arts Centre) でのヴィジュアル・アートの展覧会 “Spaced: Art out of Place” は社会、地域コミュニティに強く関わろうとするプロジェクトを試みていて興味深かった。西オーストラリアをベースにコミュニティに関わるアートを生みだそうとしている団体 IASKA によって豪州内外から招かれたアーティストが豪州の街およびインドネシア・ジャカルタで、その土地に関連した作品をつくるというもの。ローボルン (Roebourne) をテーマにしたプロジェクトでは、パースをベースとする Sohan Ariel Hayes が地元のアボリジニ組織と協力して、1960 年代の鉱山ブームが土地の先住民に与えた影響をビデオ・インスタレーションに作品化していた。会場のインスタレーションでは、パブの外形を模したオブジェに、ビールや血の流れ

る映像、土地の人々のインタビュー、歴史的資料映像、短い文字メッセージなどが映し出され、コミュニティの衰退、拘留時の死（deaths in custody）などの問題をとりあげながら、最後は長老たちのメッセージと歌で明るく締めくくられていた。他、ムキンブディン（Muk-inbudin）の砂浜につくられた女性のトルソが時間をかけて崩れてゆくさまを撮影した Julia Davis による写真作品や、ムーラ（Moora）で撮影した牧場のシーンを壁に大きく映写した Sonia Leber と David Chesworth によるビデオ作品など、作品そのものとしてだけでも完成度の高いものがあった。一方、会場で流されていた作家インタビューや地域の人々の反応の映像と合わせて鑑賞することでコミュニティにおける出来事としての面白さが伝わるものもあり、外部者とコミュニティの相互作用について考えさせられる展覧会であった。

あと一つ、“Jack Charles v the Crown”（v は versus の意）はアボリジニ俳優 Jack Charles による一人芝居（これは、22 日に観ることができた）。芝居といっても、Charles 自身のヘロイン常用時の映像が流れたり、子供時代の写真や記録が使われたり、ドキュメンタリー的側面が強い。個人的語りから徐々に 19 世紀の裁判記録などを参照しつつ、先住民アボリジニとイギリス帝国主義との関係へとテーマが移り、最後にふたたびテーブルの表板に描かれた Charles の（恐らくは本当の）囚人番号へと全体の焦点がしぼられて終わる。歌ありジョークありで観客からの笑いの絶えないステージでありながら、個人の実人生を投入して植民地主義と言う大きな問題と切り結ぶ、大胆で、真の意味でパフォーマンスな作品であった。フィクションとノンフィクションの区別の微妙さ、個人とコミュニティとの関係が変化する状況でいかに表現を行っていくかといった点についても示唆的だった。

聴くことのできたセッション・講演等についてノートとしてまとめてみたが、いくつかの主要テーマがあったように思う。一つは、虚構と事実の関係について、小説とノンフィクションの書き手が分かれる傾向にあるという意見が繰り返し出ていたが、作家たちの話からすると本人たちはそれほど事実／虚構の二項対立には拘っていない、というのが現状であると感じた。事実であることが読者が安心して読む保証になるという側面と、書くことそのものに含まれる編集から生まれる魅力、その二つのバランスは最終的に作者が決定するもので、出版社による商業的戦略に関わらず、作家個人の書くことへの意欲が最終的に作品の魅力を決定するだろう。また、もう一つの主要テーマとして、ネガティブな要素をどう描くかがあげられる。社会的象徴であれ人物の内面であれ、物語の要素としても文学の存在意義からも、日常においては目をふさがちな側面をとりあげることは不可避であろう。文学のありかたのモラリスティックな側面がここでは問題であり、単なる物語上の味つけに終わっているか、現実の問題をめぐりだす批評となりえているかは、作品ごとに精査する必要がある。最後に、先住民に関するセッションでは、コミュニティと文化の「弾性／回復力 resilience」が強調され、どちらかと言えば、明るい側面が語られていた。本質主義的な「正当性 authen-

ticity」を排他的に主張するよりはるかに建設的であるが、フェスティバル開催時にスワン川中洲のヘリソン島 (Heirisson Island) において、テント大使館設営事件が起きていたこと、会場でも先住民関連の事柄に関する一種の緊張感が感じられたことは指摘しておきたい (追記: ヘリソン島は植民地初期の抵抗者として名高いイエイガン (Yagan) の銅像があることで知られる。今回のテントは西オーストラリア政府と先住民代表組織 (the South West Land and Sea Council) がヌンガー・ランド (Noongar Land; パースおよび西オーストラリア南西地域) 先住権の 10 億オーストラリアドルでの買い取りに合意したことに抗議して建てられ、3 月 22 日に警察によって強制排除が行われるまで 6 週間維持された)。流動的な社会において、文学や言語文化がどのような機能を果たしていくのか、さまざまなヒントを得ることができたパース滞在であった。

今回の滞在は、文部科学省科学研究費補助金「オーストラリア文学に見るグローバル化と文学の変容」(基盤研究 C, 課題番号 23520344) によって実現したものである。